「八重山古陶」展 関連文化講座
八重山焼の器形と胎土について

講師：阿利直治氏
日時：平成19年8月11日（土）
場所：那覇市立壺屋焼物博物館3階図書講座室

文化講座の様子

（挨拶・目的）

阿利直治といいます。よろしくお願いします。

今日はスライドを約２５０コマほど用意しました。これを主体にしながら、私のこれまでの所見を添えさせていただいて、八重山焼とはこういうものであろうという概念を皆様なりにおつかみいただければ、私の期するものがほぼ達成できると考えています。

（経緯）

その前に、まず、おことわりをしておきたいことがあります。それは、なぜこういう展示会をしたかという経緯です。ぜひ、その一端を皆様にご報告しておきたいと思います。

那覇市に観宝堂という古美術店があります。そこの主人を吉戸直といいます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私はあえて紹介したいと思います。復帰前から沖縄の古美術に関心を深くおもちで、職業として骨董屋を営みながら古美術と関わって現在に至っています。彼は焼物が好きで、特に八重山焼と思われるものに非常に興味があって、八重山に行くたびに博物館とか関係者の方々に、「八重山で作ったと思われる焼物があるけれどもこれはそうじゃないか？」ということをさんざん提言してきた経緯があるんですよね。

私は「そうですか、そうですか」と、はっきり言えば受け流してきたわけです。というのは、その背景として八重山焼よりもすごい喜名焼というのがある、壺屋焼というのがある、湧田焼や古我地焼がある。それら他の古窯と比較した場合、八重山焼の存在感は弱すぎる。さらには八重山焼そのもの、それ自体が存在しているかどうかも八重山では認知されていなかったという歴史があったと申しあげてもいいと思います。だから、だれもまともに話しを聞いてくれない。それでも吉戸さんは彼なりの信念があって主張し続けるわけです。でも、いま申しあ

げたようなかたちでだれも取り上げてくれない。

そういう中で、２００５年に吉戸さんは、西洋美術史が専門の丹尾安典早稲田大学教授と沖縄の焼物の共同研究みたいなものを始めました。丹尾先生は去年、早稲田大学會津八一記念博物館で国吉清尚の個展を開き大好評を得たわけです。国吉清尚といえば、沖縄の焼物の歴史の中でいろいろなくくり方ができる陶工だとおもいますが、それを真正面から見据えた展示会をおこない大好評を得ました。

それに引き続いて早稲田で企画されたのが「八重山古陶」展であり、私もそれに関われたことを非常に嬉しく思っています。この二人がいなかったら今回の展示会は開催できていないでしょう。石垣市も那覇市立壺屋焼物博物館の皆さんも大いに感謝をしているところです。この場を借りてお礼を申しあげたいと思います。

（スライド）

私が今から紹介するスライドは、『沖縄美術全集１陶芸』（沖縄タイムス社）、『沖縄のやきもの』（佐賀県立九州陶磁文化館）、それから『沖縄の古陶』（観宝堂・私家版）をスキャンしたものです。とくに観宝堂の吉戸さんが出した『沖縄の古陶』というすばらしい刊行物があります。私は確信を持っています、いま沖縄の焼物に関する刊行物で、この本を凌駕するものはないだろうと思っています。じゃあ、いきます。

【焼締擂鉢　（『八重山古陶』Ｐ６）※以下、スライドについては【 】にいれて記す。】

現在会場に展示中の擂鉢です。器形ですが、底径と口径の差が大きい。したがって、開き気味にたちあがる。口縁のつくりの具合も独特です。表面に見える黄褐色の部分は釉です。おそらく松の灰によるところの灰釉の一種でしょう。松灰釉ともいいます。これは当然ながら、意図的に施釉したものではない、自然釉だと見ています。

【黒釉徳利（『沖縄美術全集１陶芸』図版１３）】

これは『沖縄美術全集』に載っています。美術全集では喜名焼で紹介されている瓢形の徳利です。どうでしょう、この器形。瓢形の徳利です。八重山焼の特徴のひとつは、典型的な器形から逸脱していくということです。この作品の瓢形は典型的な瓢形ではない。では典型的な瓢形とはなにかという話になりますが、まあこれは典型から外れているとみていいでしょう。親亀、子亀というふうに重なった綺麗な瓢箪とはみなしがたい。私は、これは八重山焼だとおもいます。ただ、私は実物を見ていないのでなんとも申しあげられませんが。器形、のうち左右非対象の具合は八重山焼の可能性があると思っています。

【焼締黒釉瓶子（『沖縄美術全集１陶芸』図版１８）】

これも『沖縄美術全集』からのスキャニングで紹介しています。底部から口縁にかけて、その器形は独特です。胴部の最大径が胴部の中央部位からやや下にくる。高台口縁部にけずりがあるかはこの写真だけでは判断できない。この作品もぜひ機会があれば実物を見たいと思って

います。

【灰釉流掛文瓶子（『沖縄美術全集１陶芸』図版１９）】

これは喜名焼の代表と言われています。クワディーサーの流し掛けの対瓶です。こちらに蓮の文様があります。ここで注目しましょう、この底部の高台は口縁にいくほど徐々に広がっていく。底径が最大径より小さい、かつ高台の高さが低い。これはあとでよくご覧に入れたいと思います。壺屋の対瓶と比較するとおもしろい器形です。

【灰釉無地碗・灰釉鉄絵碗（『沖縄美術全集１陶芸』図版２１・２２）】

ここで登場しているのは、『沖縄美術全集』で灰釉無地碗といっているものです。県立博物館所蔵のものだと思います。従来なら湧田、湧田の灰釉碗といえばこれですね。また、灰釉鉄絵碗ですが、この鉄絵については、また後から述べさせてもらいたいと思います。最近、ちょっと大事なことが分かりかけつつあると思っています。たとえばこの碗はちょっと高台が高いですね。高台から上部にむけての立ち上がりがほぼ一直線になっていますよね。器形から見れば、文様のあるなしがあるけど、ほぼ同じ時代のもだと推察できます。

【灰釉無地碗（『沖縄美術全集１陶芸』図版２４）】

これも、釉の色の違いはあります、また器形からすると、胴にふくらみがありますが、大雑把にくくれば、大局的に見れば先ほどの碗と同じだと思います。

【焼締急須（『沖縄美術全集１陶芸』図版３６）】

八重山出土の焼締の急須といえばまずこれに代表されます。異論を唱える方は少ないと思います。非常に焼締めの程度が良い。それから地肌に見える白い斑点のようなもの、これを混和材と呼んでいますが、おそらく石英系でしょう。石垣島の土には花崗岩に起因する石英がいっぱい入っています。それがこういう形で露出する。それから急須の形も、胴部で一つ段を作る、ストレートに底部から口縁まで行かないという特徴があります。

【鉄絵草葉文油壺（『沖縄美術全集１陶芸』図版４１）】

壺屋の油壺でしょう。肩の位置、肩が張るとでもいいましょうか、あまり下に来ない。最大径がわりと胴部の上までくる。このようなかたちは八重山焼にはあまりない。壺屋には比較的あるんじゃないかと思います。

【飴釉線彫柳葉文瓶子（『沖縄美術全集１陶芸』図版６０）】

これも素敵な形です。すこしかたむいていますが、聞くところによれば、窯の中で温度が高い方向に傾斜するという現象がおこるらしくて、当初からこのような斜めになったものを作ろうと意図してはいなかったようです。模様も見事で、釉は飴釉でしょう。壺屋焼であると言われています。私、この現物を見ていませんが、土が非常に気になります。このような胎土は八重山の作品の中にかなりみられます。私はこの作品はひょっとしたら八重山の土ではないかという感触を持っています。

【なまこ釉飴釉流掛香炉（『沖縄美術全集１陶芸』図版７０）】

これは壺屋焼の香炉です。なぜ取り上げたかというと、なまこ釉の色を見ていただきたくて紹介しています。八重山は土が非常に豊富です。いろんな土があります。それはどのような土かというと、花崗岩が基盤となって出来ています。花崗岩の主要な成分は石英・長石で、中には金なんかも含まれています。それが自然風化によって、あるいは二次的な風化によって陶土が出来ていきます。白土であったり赤土であったり、さまざまな土が現に存在しているわけなんです。花崗岩に原因している陶石というのは、手の加え方によってはですね、格好な釉の原料になりえるわけでして、なまこ釉については近い将来八重山から出てくる可能性を指摘する専門家も多いです。そういった意味で私はとても注目しています。だからといって、私はこの作品が八重山で作られたということを申しあげたいわけではないので、この点はご了解いただきたいと思います。

【灰釉渡名喜瓶（『沖縄美術全集１陶芸』図版８９）】

これも瓢形徳利でいいでしょう。これも壺屋焼になっています。見事な釉薬の出来具合、仕上がり具合も見事でして、胎土もおそらくは白土の系統でしょうね。釉溜まりも見事といっていいんじゃないでしょうか。素敵な作品だと思います。

【飴釉流掛徳利（『沖縄美術全集１陶芸』図版９９）】

これは器形からすると、ちょっとちがいますよね。壺屋に分類されているものです。ちょっとはっきりしませんが、灰白色の釉の上から黒い釉を掛け分けているのでしょう。フォルムとして見れば素敵な作品でしょう。

【褐釉台付瓶（瓶子）（『沖縄のやきもの』Ｐ３１）】

これは壺屋の対瓶（瓶子）です。高台が高いですよね。さきほどのクワディーサー釉の対瓶は高台がここまで高くないです。高台が高くなると壺屋と言われています。

【褐釉台付瓶（瓶子）・褐釉台付瓶（瓶子）（『沖縄のやきもの』Ｐ３２）】

これらの対瓶もあります。実は八重山の古墓からこの手の作品がたくさん出てきます。高台が高くて、つくりからすれば壺屋なのですが、持ってみると非常に重いのです。土は八重山の可能性は否定できない。ですからこのような瓶子の器形をしたもの中のあるものは、土は八重山ではにかと疑いを引き起こさせるものが数例あります。

【褐釉瓶・褐釉瓶（『沖縄のやきもの』Ｐ４１）】

これまでに、ごらんいただいてきた作品と、よく似たものが展示会場にあります。これは八重山の可能性があります。なぜそうなのかというと、重い、さらに胎土にこまかな石英、および長石がふくまれているということです。

（胎土について）

さて、私も良く分からないので、ここで問題提起をしたいと思います。従来壺屋焼と呼ばれ

てきている伝世品がある。あるいは喜名焼とよばれる焼物がある、湧田と呼ばれる、古我知焼と呼ばれる焼物がある。伝世品の出どころ、出自、アドレスといってもいいでしょう。その住所、出自が問題なんです。私が言わんとしていることは、例えば壺屋焼といわれているこの徳利を、いつごろから、だれが壺屋焼といいだしたのかということを問題視して、これまでの先学のなさった文献を逐一調べていくとですね、私ははっきりもうしあげて、非常になんというか、しっかりした検証を経ていないとでも申しましょうか。かなり脆弱な土壌の上で論じられていることは認めざるを得ない。このようなことを申しあげるのは、おそらく私ひとりではないでしょう。なぜかというと、壺屋焼のうち、上焼にどのような器種があって、いつぐらいから焼かれていてということは紹介されています。おそらくそれの一番いいのは『沖縄美術全集』の宮城篤正先生の報告でしょう。私たちが求めるのは、私たちというのは考古学的な見方からするとということなのですが、これが壺屋であるという場合、「なぜ壺屋なのか」という質問に答えがすぐに引き出せない。昔から壺屋と言われてきたから壺屋なんだ、湧田と言われてきたから湧田なんだと。要するにですね、はっきりしないんですよ住所が。

「この伝世品を誰からもらったんですか？」という話になる。「いやこれはどこそこの墓から持ってきたよ。」「ではその墓にだれがおさめたんですか？」ということになる。「いやそれはわからない。」「ほんとうにこれは１８世紀後半でいいんですか？」と厳密に問いかけてみると、「いや、そこのところは実はよく分からない」ということになってしまうんですよね。

それを打開するための作業とでも申しましょうか、その作業を私たちは今続けているところです。

私が１９８２年から発掘を担当した黒石川窯跡というのがあります。「フーシナー」と呼んでいます。５年かけて発掘調査したんです。はじめは瓦しか出なかったんですよ。だんだん調査をしていくと、地上から５メートルまで掘ると全部で７基の窯が重なるように出てきました。窯の床面、およびその窯の上部から何も出ないんですね。そのなかに、第４号窯跡と呼んでいますが、いちばんしっかりした窯跡だったんですが、それにいたっては窯を閉じているんですね。窯の窯壁が残っていまして、窯壁と床面の間は約１メートルぐらいありまして、床をきれいにしたあと、こぶし大の琉球石灰岩をぎゅうぎゅう詰めにして窯を閉じてるんです。ようするに私たちがいままでここで窯を築いて焼物作りをしていましたよという証拠を意図的に消去しているんです。そんな状況なもんだから窯の内部、および近くからモノがでないんです。では、どこから出るのか。それは物原（モノハラ）と呼ばれ所からです。物原とは、まあ、はっきりいって掃き溜めのようなところです。けっこう広さもあり高さも２メートルぐらいあって、瓦とか荒焼の破片が捨ててあって、それこそ触れば手を切りそうな状況です。物原の中にいっぱいいろんなものが詰まってるわけです。その中からは、上焼はほとんどない。ほとんど入っていないんですね。したがって黒石川窯跡の発掘調査報告書においては、この窯では上焼が焼かれた痕跡は、あまりみられない、無いとは書きませんでしたが、そう書かざるを得なかった。そういうことで長年が過ぎたわけです。

発掘された遺跡というものを二つの種類に分けた場合、黒石川というのは、かつてある種の製品を生産していたところの遺跡、つまり生産遺跡なんです。それでは何を生産していたかというと、焼物、つまり瓦と、袋物とも言いますが壺・甕などの器をメインに生産していた遺跡なんです。では、そこで作られた製品はどこにいったかといえば、それは市場に出回るわけなんです。では物原にいっぱいあるものは何かというと、それははっきりいえば駄作なんです。ガラクタ、失敗品なんです。それが物原に大量に埋まってるわけです。その状況をみて、私には背景にある市場の動向など全く視野になかったんですね。今それを非常に反省しています。現場第一主義といいますか、このような間違いは二度としたくないなといつも気に留めています。

そのような中で出てきたわずかな施釉陶器の破片というものを、比較していく中で、八重山焼の痕跡というものを、われわれは探しているのです。物原からでてきた焼物の陶片、そのうち釉のかかった陶片を、伝世品と実際に比較しながら、土がどうなのか、器形がどうなのかということの調査を進めたわけです。そのような作業を続けていけば、住所がわかるんですよね。黒石川と呼ばれる窯跡からでてきた陶片、生産遺跡から釉のかかった陶片がでてきた。それとほぼ同じ器の特徴をしている、すなわち土が一緒、焼き方が一緒、という状況を勘案して、実は私たちはこれが八重山焼だと判断してこの展示会を開いているつもりなのです。ですから、僭越な言い方ですが、このような作業を壺屋焼がやったことがあるか、湧田焼がやったことがあるか、喜名があるか、古我知あるか、という話に発展してもいいと思います。このような話は各自治体の関係者が積極的にやるべきだと思います。

さて、名蔵窯窯跡から出土した擂鉢の破片を今日お持ちしました。クイズみたいな話で申し訳ないですが。１６９５年に名蔵窯が開かれます。瀬名波仁屋という人物が沖縄から派遣されて築くわけです。名蔵窯はねずみ色の瓦を焼くために作られたようなんです。私は黒石川で痛い失敗をしているものですから、出土する資料を逐一細かく見るようにしています。よく見ると大量の瓦に混じって擂鉢がでてきます。今皆さんにお見せしているこの擂鉢は、おそらく作りとしては喜名焼にそっくりです。喜名焼の特徴は後で触れます。表面に光沢があります。この光沢はなにに起因しているか、それは釉薬です。釉薬がかかっているからですが、これは意図的な施釉ではありません。自然釉です。どうゆう状況の自然釉かといえば、おそらく窯の構造の中で、窯の中にモノを置くだけで、その燃焼室におくだけで自然釉がかかってしまう状況というものを想定しています。ということは、その自然釉というのは中にまではかかりませんよ。外面だけにかかるわけです。名蔵の窯から、名蔵の瓦を作るために作った窯から、このような発掘資料がでています。この擂鉢の破片には微妙な光沢があるんです。光沢からしても、器形からしても、この擂鉢の破片は喜名焼の特徴をそなえています。しかし、はたしてどうでしょうかね。

今からいうことは、生意気なように聞こえるかもしれませんが、非常に重要なことだと思います。ある日、喜名焼の陶工が八重山に来ます。彼は、喜名焼の技法を身につけ、彼の存在自体がまさに喜名焼として八重山にやってきます。そして、八重山の風土の元で名蔵窯を作るわけです。八重山の土をもってきてこの擂鉢を成型する。喜名焼の技法で作られた焼物が、八重山の水、空気でもって、すなわち地域の水と土と火を使って、名蔵窯の風土でもって、風土の元で焼かれた場合、もはやこの焼物はすでに喜名焼ではない、八重山の焼物だと思います。どうですかね、このような議論は。加藤唐九郎の文章なども読んでいますが、なかなかこれはという私が納得できる文献に出会えていません。まだこれからいろいろな文献を探してみたいと思います。

（スライド）

【褐釉瓢形瓶・飴釉瓢形瓶・褐釉瓢形瓶（『沖縄のやきもの』Ｐ４７）】

これらは、九州陶磁文化館の家田淳一さんが主体になって編集した『沖縄のやきもの』では、壺屋焼として紹介されています。どうですかね、八重山焼の雰囲気が濃厚だと思います。

【褐釉飛鉋瓢形瓶・褐釉瓢形瓶（『沖縄のやきもの』Ｐ４６）】

これは壺屋焼の代表として紹介します。渡名喜瓶ですよね。なぜ渡名喜瓶といういのかよくわかりません。でも、石垣にこの渡名喜瓶ひじょうに多いんです。渡名喜の人が注文するからとか、あるいは渡名喜島の古墓からよく出るから、そう呼ばれるといわれています。定説はないんですね。

【灰釉瓶・灰釉鉄絵瓶】『沖縄のやきもの』Ｐ５５

これは壺屋の油壺です。肩がはるというか、肩が首の付け根部分にくる。最大径が比較的胴部の上に来るというのが壺屋の特徴です。八重山は下膨れになるのですが、この壺はわりときりっとしています。これは壺屋の特徴として紹介しました。

【灰釉鉄絵碗・灰釉鉄絵碗（『沖縄のやきもの』Ｐ６９）】

【灰釉鉄絵碗・灰釉鉄絵碗・青花碗（『沖縄のやきもの』Ｐ７０）】

【灰釉見込鉄塗碗・灰釉見込鉄塗碗・灰釉碗（『沖縄のやきもの』Ｐ７１）】

これは中国・徳化窯の青花碗です。そして、その隣にあるのがその碗を模倣して沖縄で作られた碗です。高台から湾曲しながら口縁に向かって立ち上がり、口縁部で若干湾曲する。徳花窯の碗を非常に意識して作られています。一方、（Ｐ７１の）鉄絵がない灰釉碗は、高台から比較的ストレートに立ち上がっている。鉄絵があるものより新しいグループに属するものだと思いますね。

【呉須鉄絵線彫魚文皿（沖縄県指定有形文化財）（『沖縄のやきもの』Ｐ８０）】

これは有名な仲村渠致元作の魚文の大皿です。家田さんがすごいのは底部の写真まで撮って

いるんですよ。作者の仲村渠致元のことについては話すと、時間がいくらあってもたりません。黒石川の発掘調査は、はじめ、私・松島朝義さん・琉球大学の池田栄史さん・那覇市の文化課課長だった金武正紀さん、５名でスタートしました。そのうち松島さんは、この皿にとても興味を持っていまして、これが本当に致元の作品なのかどうかについても、いろんな考え方をもっていらっしゃいます。私も、ぜひこの現物を見てみたいと思います。はたしてこの土がどこのものか。非常に興味があります。八重山とはいっていませんよ。

【鉄釉流徳利・褐釉瓢形瓶（『沖縄のやきもの』Ｐ１５３）】

これは家田さんが、「沖縄のやきもの」展（佐賀県立九州陶磁文化館主催・１９９８年）で、八重山焼として判断した瓢形の徳利です。よくみると高台の畳み付けの外面を削るんですよね。外面を削ることで畳に接する部分が丸みをおびる、これは八重山の大きな特徴です。

（八重山古陶研究会）

じつは八重山古陶研究会というのがあるんです。これはＰＲではないんですが、いつの間にか自然発生的に発足した会です。発起人が早稲田大学の丹尾安典、顧問が吉戸直さん、事務局長が私、阿利直治。それを補佐するものが、宮良断君という、八重山ではかなり有能は陶芸家がいます。４名でちょこちょこ仕事をしています。『やいま』という八重山で発行されているタウン誌があります。その２００７年８月号をご覧いただければ、私たちが何をしているか、これから何をしようとしているか、研究会の正体がお分かりいただけるかと思います。

（スライド）

【焼締対瓶（『八重山古陶』Ｐ１４）】

丹尾さんの一番のお気に入りです。ポスターにも使われています。非常に目立つんですよね、この器形は。胴部に稜をもつ、角を持たす、このような器形は八重山焼独特のものであって、壺屋焼にはないでしょう。おそらく湧田にも、喜名にも、古我知にも。

【黒釉渡名喜瓶（『八重山古陶』Ｐ１５）】

かたや、こういう豪快な作品も八重山にはあります。展示されている資料です。持つと非常に重たいです。胎土がですね、黒石川からでている灰色っぽい。

胴部の中央でくびれる、器形下部と上部で稜をもつ、角をもつ、このような形は八重山焼以外では見られないといっていいと思います。

【鉄釉油壺・黒釉鶴首対瓶（『八重山古陶』Ｐ１６）】

鉄釉油壺ですが、このような器形、碗を二つ重ねたともみえますが、それでいて気品がある。素敵な作品です。かたや黒釉鶴首対瓶のようにスタンダードな作品も作っている。黒釉の具合もよろしくて。これは早稲田大学の所蔵資料です。

【灰釉鉄釉流掛渡名喜瓶（『八重山古陶』Ｐ１７）】

がらりと趣がかわります。でも、肩の部分に稜、角がきます。この器形、長石釉だと思いますが、その上に黒釉が流し掛けられています。比較的大振りで素敵な作品だと思います。

【飴釉火入（『八重山古陶』Ｐ２１）】

これは従来湧田焼とされていたものです。胎土が、おそらく、かなりシルト質の、つまりパウダー状の、よく茶入などに使われている土です。写真では、釉薬がかかった部分と露胎の部分のちょうど境目に、火色がきれいにでています。施釉部分と露胎部分との境部分によく発色すると宮良断君から教えてもらいました。これも、八重山の可能性が高いと思いますよ。これには異論はあると思いますが、土の状況から八重山と判断し展示しています。

【焼締茶碗（『八重山古陶』Ｐ２３）】

これも見事な作品です。東京の個人所蔵です。無釉です。展示作品ですので、ぜひ堪能していただければと思います。注意したいのは白い斑点状の混和材です。石英です。それがよく見えます。これがいい味わいだと思います。口縁の流れるようなラインもね、二度と作れますかね。見事です。

【呉須釉碗（『八重山古陶』Ｐ２２）】

この作品をよく見てください。この非常に薄手の碗ですが、非常に薄作りです。器厚、器の厚さが２ミリから３ミリで薄いんです。釉は呉須釉といっています。緑色だから呉須釉、あるいは天然の呉須釉という意味もあるでしょう。今、私が言いたいのは、土は非常に細かいです。水濾しています。耐火温度はあまり高くないんでしょうね。還元までしていません。酸化炎で焼かれています。ある人が、これを見てこう言うんですよ。土は八重山、焼かれたのも八重山、釉薬の原料も八重山。しかし、八重山焼の中で２ミリとか３ミリでもって口縁から胴部までつくる技術は八重山の焼物にない。ようするに八重山焼としては良すぎると言うんです。技術が高いから八重山焼ではない。皆さん、こんな論法がありますかね。技術がよすぎるから八重山ではない。

実は今回の「八重山古陶」展について３名の方が新聞（沖縄タイムス）に寄稿していただきました。最初が東京大学の石井龍太君、次が那覇市首里の松島朝義さん、３回目が琉球大学の池田栄史さんですが、その松島さんが、新聞にこういう風に書いてるんですよね。「粟絵の模様が入った壺【飴釉線彫渡名喜瓶（『八重山古陶』Ｐ３５）】は、士族のにおいがするから八重山的ではない。」ようするに技術がよすぎるといってるんです。技術がよすぎる焼物は八重山焼にあらず。どうでしょうかね。私はやっぱり、目の前の対象物を素直に対応すべきだと思いますね。「技術が高いから八重山焼ではない」という言う方をする方が、実は大勢いるんです。私のような言い方をするほうが、マイノリティーなんですよ。

（スライド）

【褐釉チューカー（『八重山古陶』Ｐ２５）】

これも素敵な急須ですよね。これは土が八重山です。

【褐釉面取徳利（『八重山古陶』Ｐ２６）】

これが面取りする徳利です。瓶子（ビンシー）のほうがいいのかな。高台が最大径より小さくなります。

【焼締褐釉流掛蓮座文瓶子（『八重山古陶』Ｐ２７）】

これは従来喜名焼といわれていた対瓶です。壺屋焼で見たような高台の高さはありませんね。胎土は、赤銅色と私は呼んでいますが、赤みを帯びた赤土系統の素地を使っています。釉が流し掛けされています。この釉については、辰砂（シンシャ）であるといわれています。この話をすると長くなるのですが、辰砂釉のベーシックなものが八重山にはある。もちろん沖縄本島にもあるでしょう。八重山には実際に採掘をしていた銅山跡が今でも残っています。銅がよくとれる地域なのです。したがってある方が、これをみて辰砂釉ではないかといっているわけですが、この点は注目すべきところだと思います。やっぱりこれは八重山焼でしょうね。

【黒釉面取徳利（『八重山古陶』Ｐ２９）】

この資料の底部には「八重山」という文字が入っています。この文字がなければ、おそらく湧田か壺屋になっていたろうと思います。ただ、釉がめくれていますからね。釉がめくれる、釉がはがれるものは八重山といわれています。作品として出来栄えは素晴らしいと思います。

【飴釉渡名喜瓶（『八重山古陶』Ｐ３１）】

この器形も素敵ですね。このような器形は八重山以外にはありえません。

【鉄釉長石掛分渡名喜瓶『八重山古陶』Ｐ３２】

これは黒釉を上から下にながしています。長石釉でしょう。長石釉というのも八重山焼以外には、あってもいいんでしょうが、あまり聞かないですよね。

【褐釉渡名喜瓶・褐釉線彫徳利（『八重山古陶』Ｐ３４）】

褐釉線彫徳利ですが、この徳利は、繊細で技術的に優れているので八重山ではないと、松島朝義さんははっきりと新聞に書いています。ただ、この徳利は、１５世紀の八重山の遺跡からよく出てきます。また、与那国の古墓からもよく出土します。

【黒釉油壺・灰釉油壺（『八重山古陶』Ｐ３８）】

黒釉油壺ですが、先ほど壺屋の油壺は肩が上部に来るといいましたが、これは壺屋に比べると若干下のほうに来てますよね。灰釉油壺これも見事ですよね。タイの窯場でスンカワーロクという窯場があります。スンコロクと呼ばれますが、それの写しだと言われています。この機会を逃したらもう二度と見られないでしょう。東京の個人の所有で、展示会が終わったら東京に持ち帰られるようです。土が八重山なんですよね。これを八重山とするには異論が多いと思

いますが、この頚部のつくり、頚部中央に稜線をいれる、やはり八重山でしょう。

【クワディーサー流掛徳利・焼締徳利（『八重山古陶』Ｐ４０）】

このクワディーサー流掛徳利は、従来は喜名焼とされています。クワディーサーの釉が下から上へ掛けられています。土が八重山です。なぜ八重山かということになれば話が長くなりますので、私は答えは用意していますので、できれば後ほどの質疑の中で受けていきたいと思います。

【徳化窯・青花碗】（以下スライドは石垣市教育委員会所蔵資料）

これは石垣の川平の古墓から出土した中国の青花、染付けともいいますがその碗です。福建省の徳化窯で作られた磁器です。これが内面、見込みの部分です。見込みは蛇の目釉剥ぎ、重ね焼をするときに碗同士が溶着しないように釉を剥ぎ取っている。輪状に剥ぎ取るので真ん中に釉が残るという状況です。

【灰釉碗】

これは中国・徳化窯青花碗をコピーした沖縄産の碗です。文様はそっくりには真似していないが、かなり意識している。草花文の一種でしょう。施釉の方法はおそらくフィーガキーでしょう。内面、見込み部分は蛇の目釉剥ぎではないんです。わざわざ釉を、おそらく指で塗っている、塗布してる。蛇の目釉剥ぎは、しょうがないから釉が残ってるわけですが、そこまでわざわざ真似る必要はないんですが、真似ているんです。

【灰釉鉄絵碗】

この草花文、私はL字型といっていますが、吉戸さん曰く「絵唐津のコピー」です。可能性は大だと思います。非常に注目しています。

【灰釉鉄絵碗】

これもL字型です。問題はこれがどこで作られたかです。今は言いません。これは企業秘密です。

【灰釉鉄絵碗】

これもL字型です。土は八重山だと思います。なぜ八重山か、これも企業秘密です。

【飴釉碗】

模様のないタイプが出てきます。これも土は非常にいいものです。これも見込み部分にチョンと釉を塗布しています。やる必要がないのに塗りつけるという、継承性といいますか、非常に参考になります。

（質疑応答）

さて、用意したスライドをお見せすることができました。

私は八重山焼とはこのようなものであるとは、申し上げなかったつもりです。なぜかという

と、そのような状況にまで、まだ熟していなんです。これから質問を受けたいと思います。これから質問を受けたいと思います。私もまだ若輩者ですから、できればお互いの情報を交換できていけばいいかと思います。どのような質問でもかまいませんので、どんどんご質問ください。

その前に、先ほど薄手の碗の話がありましたが、八重山の消費遺跡からそのような薄手の碗の発掘資料が出てるんです。あちらこちらから、八重山の遺跡から出てるんですよ。１６・１７世紀の遺跡からよく出てきます。技術がいいから八重山ではないと言われた、その碗とまったく同じ土です。若干厚くなっていますが、八重山焼そのものです。技術がいいから八重山焼であるという議論は成り立っても、技術がいいから八重山焼ではないという議論は成り立たない。やっぱりおかしいと思いますよ。

《質問者１》私はヤチムン通りで骨董屋をやっている田野多といいます。
まず、最初の質問ですが、今ご紹介があった薄手の碗が出土した消費遺跡とはどこですか。
《阿利》これは、野底遺跡です。私が発掘をして、今その発掘報告書は作成中です。
《質問者１》窯跡ではないんですね？
《阿利》窯跡ではありません。集落跡です。消費遺跡です。
《質問者１》私の考えでは、八重山の湧田に似たものとか、喜名に似たものというのは、窯跡でなければ、たとえば消費遺跡ならば、外から持ってきたということも成り立つのではありませんか？むしろそういう可能性のほうが大じゃないかなと思うんですがどうでしょうか？
《阿利》当然です。おっしゃるとおりです。この野底遺跡からは、同じ古さから中国製の製品も出ています。少しはなれたところからは須恵器も出ています。在地モノばっかりではありません。この遺跡はかれらが生活している場所ですから。彼らはいろいろなものを使っています。
《質問者１》ならば、その陶片が八重山焼であるという根拠はなんですか？
《阿利》私は、八重山の遺跡から出たからこの陶片が八重山焼であるとはいっていないんです。この土の状況から、八重山焼の可能性が高いと言っているんです。
《質問者１》先生のお話をお聞きして、形・土についていろいろおっしゃることを聞いていると、判断の根拠が非常に感性的・感覚的なんですよね。見た目は、年代とか焼の具合とかで相当のバリエーションが生じると思うんですよね。感性的な判断ではなくて、もうちょっと科学的な、成分を分析してやるとか、あるんじゃないでしょうか。見た目だけでは、やはり誤解をまねくのではないでしょうか？
《阿利》感性ですか。私、好きな言葉です。
《質問者１》はい、非常に感性的だと思います。今回の八重山展は非常によかったと思いますが、問題はその感性が本当に八重山なのか、特に上焼の場合、私は疑問に思っています。

《阿利》先ほどクワディーサー釉の徳利がありましたが、従来喜名焼と言われていたこの作品を、なぜ八重山焼といったかというと、胴部に混和材がはじけた、焼成中に過熱されて内部破裂した跡があります。実は私はこの混和材に関心を持って追求しています。喜名焼と八重山焼の比較研究は大きな課題です。ただ、比較研究までいたっていません。なぜなら八重山焼という概念自体がきっちりまとめあげられていないからです。これはあと１・２年あれば「八重山焼」とはこういうものであるという体系的なものが出来上がると考えています。こういうものが出来上がった時点で、あとは壺屋とか、喜名とかとの比較研究をどんどんすすめていきたいと考えています。まずは自分の足元をきっちり固めたいと思っています。現在、八重山焼以外の焼物の混和材との比較を頻繁にやっているところです。その中で、大きなメルクマールとなるのが混和材です。八重山焼の中でも、とくに釉のかからないものには、石英があるんです。スライドでも白いものがいっぱい写っていましたね。この石英が大・中・小とあるんです。様々な形をしたものが不規則に、ランダムに胎土の中に入り込んでいるんです。この石英が、八重山焼の中だけに含まれていれば話は早いんですが、そうじゃないんですよ。喜名焼の中にもある。したがって石英があるから八重山焼とはならない。石英が入っていないからノン八重山焼とはならないんですよ。ところが、よく見ていくと八重山焼の石英と喜名焼の石英では違うんです。どうも違うような気がします。八重山焼の石英の表面には光沢がある、喜名焼の石英の表面には光沢がない。にぶいんです。そのような感触をもっています。これは非常に大事な点になると思います。本当はこれも企業秘密にするべきものだと思いますが、あえて言っていますが。

これを切り口にしながら、八重山焼と喜名焼のおおきな見分け方、指針にしたいなとおもっています。作品をぱっと見たときのインスピレーション、これはとても大事だと思います。でも、そんなことは私よりもずっと長けた人がいるんですよ。我々の研究会にも。今、私がやっていることは、実は非感性的な部分をやっているんです。かなり厳密な科学性をもって、まだその成果はでていませんが、その作業をしているところです。その点、ご理解いただければと思います。

《質問者１》見た目だけではなくて、もっと正確な分析方法があるんじゃないですか？

《阿利》あると思います。私としては、すぐに分析会社に持ち込んで成分分析を依頼するということはしたくない。自分でできる観察ラインのぎりぎりのところまでは、自分でやってみたい。それを超える研究課題にぶつかったら、それは鉱物の研究者や地質学者に見てもらおうと思っています。やれることはやりたい。ただ、そういう努力はせずに、どこかの著名な研究機関に下駄をあずけるようなことはしたくないと思っています。私なりのやり方を見出していきたいと思っています。

《質問者２》八重山焼に関心があって、調べたり集めたりしています。一般的に八重山というと、重くて釉の乱れがあったり、それともう１つ高台底に窯印というか数字が入ったものがあるんですよ。数字は湧田や壺屋、古我知あたりには皆無なので、この数字が、八重山焼、特に上焼

系統を見極めるのに重要になるんじゃないかなとおもいますが、いかがですか。
《阿利》今のご指摘、とても重要だと思います。窯印といわれていますが、数字がかかれるんです。一番多いのが、「八」です。それから「十」「三」「二」「一」「十一」とあります、「五」はみかけない。これがなんなのかということですが、連坊式登り窯なら窯印をつける意味もわかりますが、八重山はおそらく鉄砲窯ですから、よくわからないんです。発注者の番号じゃないかという人もいるんです。ただ、八重山焼であるという大きな根拠にはなると思います。
《質問者１》私の意見としては、八重山は共同窯だと思うんですよ。一緒に焼くでしょ、そうしたらどれが自分が作ったものかわからなくなるから、作った人がそれぞれで窯印をつけるんだと思います。窯出しの際に、どれが自分の製品がわかるので、それでつけたんだとおもいますよ。壺屋にもたくさんあります。
《質問者２》マカイ（碗）には数字がないんですよね。
《阿利》そうなんです、マカイにはないんです。不思議ですよ。
《質問者２》先ほどから紹介されている碗ですが、碗には数字が入らないので、あれを八重山焼であると決め付けるのは難しいと思います。
《阿利》碗に数字がかかれたものが１つもないんです。
《質問者２》じつは碗に「十九」とかかれたものがあるんですよ。今、持参したんですが、八重山焼特有の釉の乱れと厚さがあるとおもいます。
《阿利》重いですね。重さは八重山ですね。これは素晴らしい。これは八重山的ですね。私、何でも八重山にしたがるので。
《質問者２》それともう一件いいですか？土で八重山とわかるとおっしゃるけれども、湧田・壺屋の初期はほとんど白土で作られているんですよね。ですから、土だけで判断するのは難しいような気がしますが。
《阿利》そうです。非常に難しいと思います。私はいいわけめいたことを言うつもりはありませんが、今、八重山の白土にはどのようなものがあるか、土の粒子や構造、石英や長石など、白土自体の組成を調べなくてはいけないのですが、今それをやっているところです。八重山の白土には独特のものがあって、それがではいったい何なのかという概念を今後提起したいとおもっています。
《質問者３》石垣島で焼かれた陶器を、総称して八重山焼としているが、今後は黒石川焼、名蔵焼というふうに、窯ごとの区分けが可能になっていくのか？
《阿利》できればそうしていきたい。ただ、まだその段階にはないということです。

その後の質疑応答では、可能性があるものはすべて八重山焼としていく姿勢は、いまいちど厳密に精査すべきではないかという指摘や、八重山でも大いに生産された瓦との関係、あるいは商品の流通ルートとの関係から、今後どのような展開が可能かという質問があった。また、八重山焼の特徴である非常に重いということについて、それはなぜかという質問がだされた。それには土を単味で使うと重くなるといわれているという回答がなされた。

時間の都合上文化講座は閉会したが、閉会後も積極的に質疑応答が為されていた。

八重山古陶を考える

田野多 榮一

１　「八重山古陶 －その風趣と気概－ 展」をみて

２００７年、「八重山古陶－その風趣と気概－」展が東京の早稲田大学會津八一記念博物館を皮切りに、那覇市立壺屋焼物博物館、そして石垣の大浜信泉記念館で開かれた。この展示会の特徴は、釉薬が塗られた上焼の伝世品が発掘された陶片と共に見ることが出来たことである。八重山の古陶は、今まで荒焼は知られていたが、上焼はほとんど目にすることはなかった。出土した上焼の陶片は、八重山の古窯跡から掘り出したものだと言う。湧田焼と見違える程そっくりなものがあって驚いた。伝世品を見てみると、私が湧田焼と思っていたものや、喜名焼、古我知焼と見まがう品々が展示されていた。伝世品の土や形、雰囲気から判断して八重山焼だと識別したという。しかし、今までに八重山の古窯から発掘された上焼の陶片は、陶片全体の１パーセントに過ぎないとのことである。展示会の期間中におこなわれた石垣市教育委員会の阿利直治氏の講演を聞いても、疑問点は深まるばかりであった。「風趣と気概」と云うサブタイトルが付けられた展示品は、みな美しくすばらしいものばかりであった。八重山の人でなくとも、もしこれらが本当に八重山で作られたものなら沖縄の焼き物の歴史に新しい１ページを加えるに違いないと思われた。それ程展示会は、刺激的であり沖縄全体の古陶を考える上で、良いきっかけを作ってくれたと思う。これらが本当に八重山焼かどうかを判断するためには、沖縄本島にある古陶、湧田焼、喜名焼、知花焼、古我知焼、壺屋焼やその他の古陶がどんなものかを知っておく必要がある。比較出来るからである。 しかし、残念ながら沖縄本島全体の窯跡や出土品の調査が十分になされているとは云えないので比較の仕様がないのである。
八重山も古窯の調査が十分でなく、まだよくわかっていないのを感ずる。出土した陶片の科学的分析もなされていないようだし展示されていた伝世品が八重山で作られたものだといわれてもすぐには信じられないのである。八重山焼の特徴とは何なのか。重たいとか長石や珪石が含まれているとか釉薬が剥げているとか形や雰囲気が八重山であると言われても、やはりまだ分からないのである。気概のあるすばらしく美しい焼き物が実際には作られていて、これらが八重山焼だと云われても、そうありたいという願望や思い込みが強すぎる結果、八重山焼だとしているのではないかと思ってしまうのである。

たのだ　えいいち：（壺屋やちむん通り会元会長、古美術 壺や 店主）